

準会員だより

栗原健士
黒川憲
E

「MD-PhDコースを終えて」

医学科5年 栗原健士

本年度よりMD-PhDコースを修了し医学科5年に復学する事となりました栗原健士と言います。私はHBS研究部・生体防御医学分野・安友康二教授のもと基礎研究に携わりましたので、このコースへの進学理由・このコースで得られた事を書かせていただきます。

MD-PhDコースと言いましてまだまだ馴染みのないものですので、簡単に説明させていただきます。現在、日本では研究に携わる医者の数が多いとはいえず、このコースに進むことにより一足先に研究マインドを学ぶ有意義な機会になっています。ですので、本コースの目的は研究のできる医者を育てるのが目的として医学科4年次修了時に3年間研究に没頭し、研究とは何だ?というものを学ぶコースとなっています。ですが、このコース自体がまだまだ認知されておらず進学する学生は少ないのが現状です。今後このコースに進む学生が増えてくれれば何よりと考えています。

まず、私がMD-PhDコースに進むに至った動機・生体防御医学分野に至った動機について述べさせていただきます。このコースに進んだ理由はもとより研究職というものに興味があったということが大きな理由です。もちろんそれだけではなく、私は医学科3年時にある研究室配属で生体防御医学分野を選択し、この分野に強く興味を持ちました。その理由は、生体防御分野は

免疫系、Tリンパ球が中心となって始まる免疫応答の解明を試みている分野になります。免疫系は多くの疾患からの回復・原因となることがわかっており、免疫系の詳細な理解というものが人の健康の維持・疾患の治療に直接的につながると考えられたからです。このような理由からMD-PhDコース・生体防御医学分野に進むことに決めました。3年時に生体防御医学分野を選択できたことは非常に運が良かったと今では思っています。

さてこのような理由でこのコースに進学しましたが、実際にどのような研究ライフを送っていたかというものが気になるところです(のはず)。生体防御医学分野の一週間は月曜の朝にある毎週の進捗状況を報告するmeetingから始まります。この時に自分で行っている以外の先生方の研究の発表もあり、自分の研究にたいするヒントとなる情報も数多く得られました。また、水曜日には他のラボとの論文の読み合わせもあり、様々な雑誌に掲載された論文を読み合わせ討論する場になっています。残りの日は完全にフリーになり、自分で予定を組み進めていくというものになっています。この様な生活のもと私は免疫系に広く発現しているある表面分子についての研究を3年間行いました。この3年間でいい結果が出る時もあれば、良い結果が出ないときも当然ありました。そのようなときは初めのうちはモチベーションも下がりがなかなか進まない時もありましたが、指導教官から「たんとやることが大事」と言われ、実際その先生もやっており見習わなくてはと思い、そのような精神のもと3年間すすめていきました。また3年間のうちに様々な国内学会に参加し、様々な先生方との質疑応答の中で自分の行っている研究



そうした際も、ストレス制御医学分野の先生方、そしてMD-PhDコースの先輩・同期・後輩の存在はとても大きく、その他多くの方々の暖かいご支援のお陰で、今まで乗り越えて来られたのだと思っております。

MD-PhDコースを選択すると、医学部を卒業するまで通常より3年多く時間を要しますが、それにも増して、この3年間で非常に多くのことを学び、また力強くなることが出来たのではないかと思います。2012年4月より医学科5年次に復学致しましたので、今後は臨床の勉学にも励み、将来こうした様々な経験を生かせるように、頑張って参りたいと思います。

最後になりましたが、本コースでは、ストレス制御医学分野六反教授、MD-PhDコースの整備にご尽力されている玉置医学部長や青藍会を始め、多くの先生方に大変お世話になりました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。